

西鶴旅談叢

京坂の紀行

幸田成友の本辰宣出漢  
一口鮎二と保津川と下り  
三浦舟人を詠ふ  
大坂旅の酒涼  
尊徳堂と茶  
大坂の清茶湯  
高知今社前と大坂

坤  
卷ラズク

乾

特別  
14  
1919  
214





西鶴談笑叢

國吉判行信の由を帯ひ今も定在因付  
 去り一日車乘を是し十二百と大坂西条  
 を周旋し其の間に又又しし事  
 世を者きらけ遊し西鶴談笑叢  
 と云ふ

○大坂の東土町に十枚紙の木版は御録書心古典  
 の二字を刻し左頭下吊し懸る書物なる事  
 久しきの麻の懸せむいふ事御録書心古典  
 の名は御録書心古典の如しある  
 入口の目下駄ぬきの上へは細字あり刻し此木の  
 額を掲げし事御録書心古典の御録書心古典



の青目と 藍一七徳川氏の末路 殿受と物あり  
青目二十 絶別 ぬきあるが 母榊の本板  
三流子 刻一 角版代り 揚げとあつらふ  
主ありと思ふ人の 案のつらふに 二階くもつて  
つとえが 京目しに 又成つて 二百の  
襖のあつ、こみりと 赤井の 流行や 山方の 赤い  
あつらふ 又人の 首行 ぬきと けしき  
七つて 出つて ありと 無延と けしき  
ぬき名 ありと ぬき名 ありと ぬき名 ありと  
掛部も 二枚ありと ありと ありと ありと  
のちのち ありと ありと ありと ありと  
とのあつ 平一 笈原の ありと ありと ありと

の青目と 藍一七徳川氏の末路 殿受と物あり  
青目二十 絶別 ぬきあるが 母榊の本板  
三流子 刻一 角版代り 揚げとあつらふ  
主ありと思ふ人の 案のつらふに 二階くもつて  
つとえが 京目しに 又成つて 二百の  
襖のあつ、こみりと 赤井の 流行や 山方の 赤い  
あつらふ 又人の 首行 ぬきと けしき  
七つて 出つて ありと 無延と けしき  
ぬき名 ありと ぬき名 ありと ぬき名 ありと  
掛部も 二枚ありと ありと ありと ありと  
のちのち ありと ありと ありと ありと  
とのあつ 平一 笈原の ありと ありと ありと



いろくの本を蕩るをその内不(禮儀)の  
の(禮)三冊にえりつるを(禮)と給ちか(禮)  
元つに(禮)古(禮)ありと(禮)を(禮)と(禮)と(禮)と(禮)と  
言ふと(禮)出(禮)し(禮)ち(禮)外(禮)又(禮)重(禮)なる(禮)二(禮)行(禮)一(禮)  
字(禮)沈(禮)持(禮)断(禮)碑(禮)一(禮)本(禮)良(禮)無(禮)福(禮)寺(禮)相(禮)傳(禮)を(禮)の(禮)  
多(禮)く(禮)名(禮)家(禮)古(禮)間(禮)抄(禮)を(禮)平(禮)入(禮)れ(禮)ん(禮)と

伊藤平左衛門守吉簡

源藏平左衛門才外(三)

菅月(尾西雅嘉) (三)

頼文(三)

後藤(一)

○(禮)の(禮)本(禮)の(禮)裏(禮)の(禮)貴(禮)者(禮)先(禮)の(禮)お(禮)を(禮)て(禮)瑞(禮)卷(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)  
其(禮)の(禮)今(禮)文(禮)に(禮)載(禮)り(禮)て(禮)る(禮)は(禮)一(禮)に(禮)は(禮)相(禮)傳(禮)す(禮)

臨禱(遊良)本の裏の貴者、先のおを、瑞卷  
今日(は)く(と)存(其)内(又)類(貴)者(是)は(は)に(ま  
ら(女)と(存)例(の)及(た)裏(自)記(表)字(の)誤(を)  
啓(上)任(後)、御(防)被(成)ま(る)も(と)し(る)由(を)  
負(は)し、僕(不)本(旨)、坪(の)ぬ(る)は、終(帳)所(収)蔵



一兩耳、獲る足如拱壁、此者家黄白兩集之比也、  
也、さんち先口即ちその也、防カ一杯、冬候先  
御忠心の被下候、此即ちを指、一衣服振下  
るるすの歎と、疾音改るる

○在津紀事跋所謂簡高稚淺(自注、板作馬  
似正)是兄自道也、何ぞ小ミズ(缺五)を言え乃  
人と存候、此一向を三候、是兄本用長勝  
僕本用短勝、今是兄長短互用、唯其所納三  
舎、不知是兄近未服何茶、而才思長進、  
此此(自注是兄の乗セ口上を言ふ)非ず、カウ  
外無言振)

○松茸賦を以て表吸ても得るぬ事、コワイ

丸

併効為屹乎、平仄如何、アノ位のはは、  
終の方以海冬为伴、意、嫌意思窮、  
子所未言、固其宜然耳、是は故え端(二)も  
個扱被申居候

○精里先生自叙(墨江其他の七律二首あるも)  
七念必也、然し是兄六長於文、詩少好と下歎  
○僕近文、片断懶於淨書、未暇と云候  
此裏の詩(村上ま吾子孟仲宅、湯三條並お孫  
賦此孟仲、十六款)るる、浪々風をサつ  
てんら也、清をして清下候、○者るる何



赤家風を止んと取却郵と歩の義味も御意  
及方はさしや(自注、諸君も御意を以て其每  
不成る候)

○御心遣の事御意より、如何に御意候事  
御事候(自注、おは採、伯母と云)並令聞さる  
候

○臨請、筆下意ア、テハ百きくと取候事候  
候

○嘉耦は、その所カーナ

○二方金の張込、五方金の振廻り候事  
候(自注、此地よりと交遊あり、村瀬を  
引寄候候と云々)

其地を先々(三行)の洲を寺、村懐一隅、不肯  
降奉候(自注、此より先々より)候  
下候)

○後史既論、賛敷を以、此地も亦自由は御意  
拜借する候事候

○自注、今年中位のこと論、御意を以、急  
みせん候、(自注、此より先々より)候  
候(自注、此より先々より)候

○金谷、直と古状を者出の候、御意の御  
宣、御意仰、御下候、御中、御意、一々、御意  
候、御意出、御下候、御下候、御下候、御下候







七二回より拾う

然らば押韻の所多ク、ミチツト違ひの綴生じ  
師其猶有知者乎、我後文以自遣

○最後に嗟乎、衣冠、而魯、海濱、瑞瑞の出て  
行くの程、うて、うけんば、うま、うま、  
にう、うて、うま、うま、自老切り、うま、  
成體、扱、うま

○時、以来、風、節、節、節、鉢、甚、う、  
今、後、文、筆、一、軌、範、の、下、見、後、文、の、直、し  
る、を、後、進、勉、作、此、者、ヨ、ワ、ホ、ト、の、勉、ま、  
左、柳、思、え、う、柳、を、候、又、拜、

山陽

十二 田辺版

(小竹宛)

○幸、因、成、友、を、幸、因、夜、待、の、あ、び、あ、ま、う、う、大  
坂、市、史、の、海、を、あ、ま、進、つ、て、ま、る、二、三、回、を、う、て  
流、し、て、う、ま、市、史、を、う、り、う、出、ま、あ、ま、う、ま、  
に、ま、し、て、う、ま、海、を、の、ま、ま、あ、ま、あ、ま、  
五、果、因、の、ま、ま、の、ゆ、え、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、  
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、  
の、山、に、と、ま、あ、ま、あ、ま、  
昔、の、流、を、ま、方、後、の、流、を、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、  
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、  
あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、



皇を信ずべし集め此のふあるとそよこ

平史編纂の材料を採りし者女のそあるを  
材料と浮心集まりたりとぞいともたふらふとの  
きとそい、地圖をぞい、明暦以前のもの、  
午の入り、時の地をぞい、古き古き記  
録、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
月をもとめ、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
の依るの記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
幸ゆと又余の市中、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
の又、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
その、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、

遺物を敬供を世に武人とを印し、松坂の豪  
家中、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
こと、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
傳の原をも見、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
へき、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
明、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
清、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
本、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
本、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
の、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、

昔の又、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、  
依、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、<sup>中</sup>三井の記、















よき〜く此をう鑑みはるる事〜  
○と感しに

○御座るの大に頼次氏に傳へ京政をなると終り  
ある人々を〜お推しをを保津河を遊べん  
船中〜大に余の終る〜  
の如き事〜  
とある〜其の如き事〜

い〜の〜  
あがら〜  
〜

ねかしら〜  
こゝのう〜  
く〜

保津の川船

た〜の〜  
物子の〜  
の〜  
心〜

周あひ

○保津河を〜  
保津河を〜















此大川のふもとを尾山とて言ふも、  
此世のことか、古きころは此の川を大堰川  
とて早くとくし、いんを又山を彼の  
定家、別荘を構えたる誰かともいふ  
小倉山と即ち此世のことか

○大坂と大谷地は、高き地は、  
のちを御とて、昔物をもて、  
見てもきん、まがら、  
つと、  
この位は、  
行の、

此のふもとを、  
出来、  
つと、  
か、  
七、  
の、  
文、  
ま、  
明、



















いふ事ある事一の土地にのみある一帯の  
流にあり即ち川の一方を末尾河の一方を株式  
市場にあり、其の中より河の流にえんふおま  
の僅々一のものに似ていふ事、往年一に似  
の流に三伏の事あり、船をゆく川を其  
くむもの事、流をさしにさうゆつ五年に  
い前、さうもの川の中央に納涼をせと名ける  
杖持の橋掛のものを完き出し、いんた程さの  
多るやと名をるをいし、さうお船の事を  
大分を物し、いしとさふこと、いさの納涼を  
と事さる、いさの帆の流、船の掛、つとさ  
いさの川の中央を流さる、いさの

いさの川の橋、杖持のものを完き出し、いんた程さの  
多るやと名をるをいし、さうお船の事を  
大分を物し、いしとさふこと、いさの納涼を  
と事さる、いさの帆の流、船の掛、つとさ  
いさの川の中央を流さる、いさの

いさの川の橋、杖持のものを完き出し、いんた程さの  
多るやと名をるをいし、さうお船の事を  
大分を物し、いしとさふこと、いさの納涼を  
と事さる、いさの帆の流、船の掛、つとさ  
いさの川の中央を流さる、いさの





























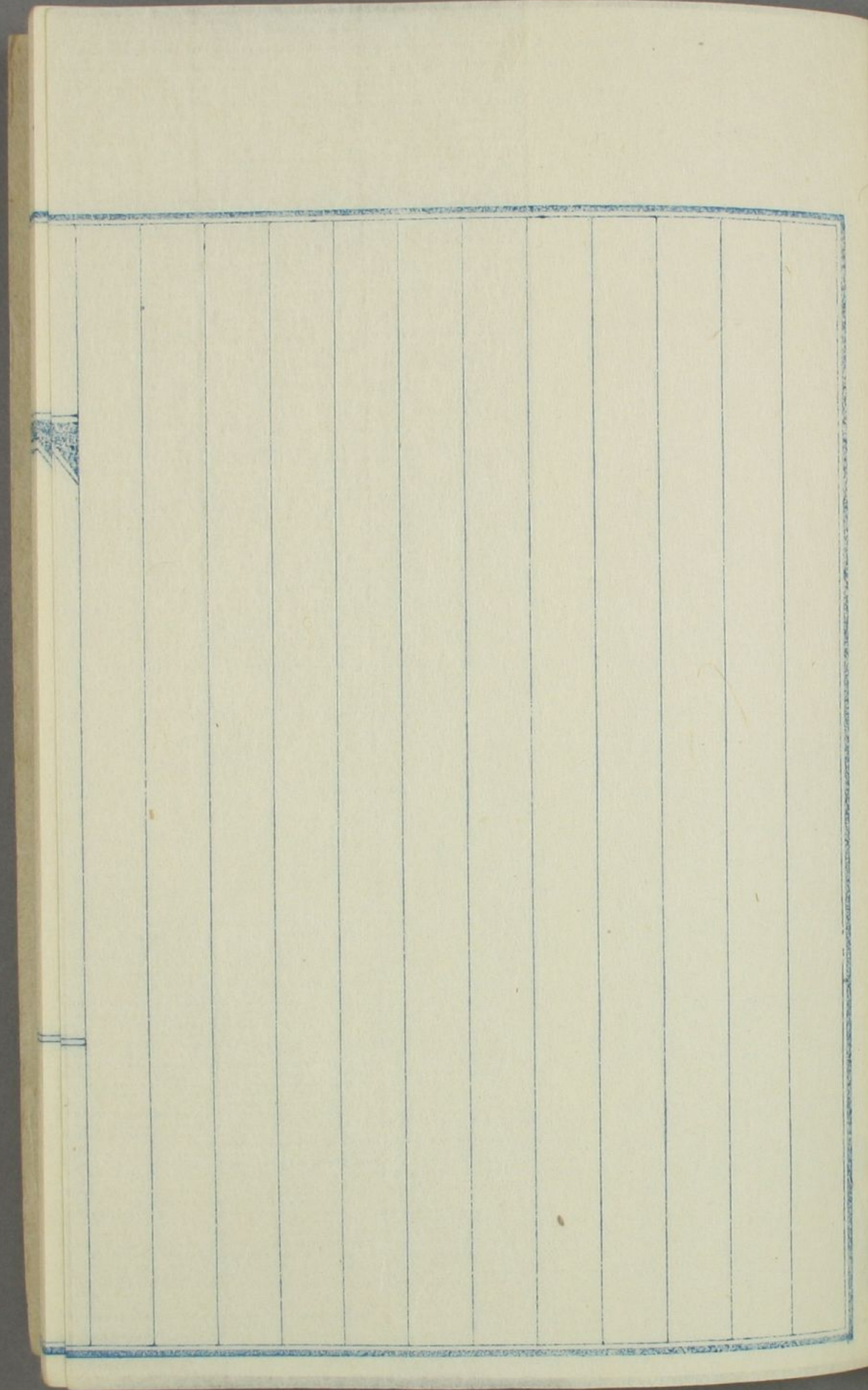




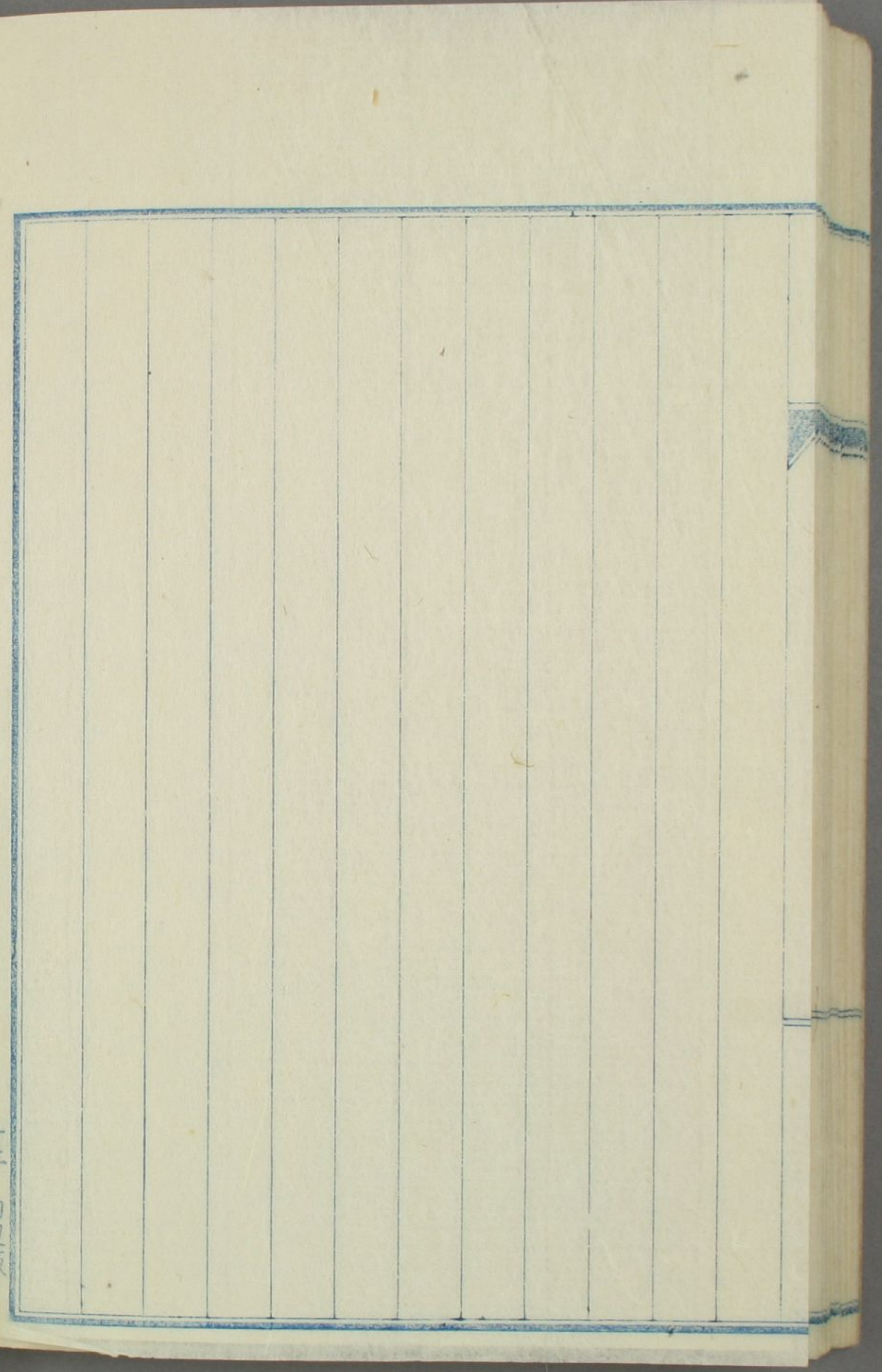








十二 田辺版





以下全て

白紙



明治三十八年  
八月中浣

春城陳人